

研究成果報告書

1. 研究概要

八王子市では、小・中・義務教育学校に特定分野に特異な才能のある児童生徒がいる。しかし、特定分野に特異な才能のある児童生徒一人一人の能力を見出し、伸ばすための個別最適な支援は既存の教育課程では必ずしも十分とは言えない。一方、八王子市は全国有数の学園都市であるとともに、地域の任意団体・NPO等の生涯学習活動が活発なまちであり、特定分野に特異な才能のある児童生徒の支援に賛同する意欲的な地域人材に恵まれている。

以上のことから、特定分野に特異な才能のある児童生徒に対し、本市の特性を生かし、学校と学校外とが連携し、必要な支援を講ずる。

2. 研究内容

八王子市立学校に在籍する特定分野に特異な才能のある児童生徒を対象に、休日の土曜日に、学校と連携してこの才能の伸長を支援する生涯学習活動として講座を設け、協力校及び近隣校で募集する。申し込みをした児童生徒、保護者との面談や作成した作品等の確認を通して、得意分野や隠れた能力を把握する。把握した特異分野や能力を伸ばすため、一人一人に応じた指導計画を保護者、在籍校の教員、支援する大学教員等と作成する。指導計画を基に、児童生徒一人一人が芸術（絵画、彫刻、工芸、グラフィックデザイン）、工学（プログラミング、ゲーム開発、映像、音楽）、デジタル技術（アニメーション、漫画、写真）などの中から、得意な才能に合致した学ぶ内容を1つ選択し、大学教授等から指導を受けることを通して、一人一人がもつ能力を育成するとともに、活動前後の児童生徒の成長や作品等の分析評価を行い、事業の実施効果を検証する。

（1）研究課題

（研究領域1）学校内での取組に関すること

- ☐ a 単元内自由進度学習や異年齢集団による学習、理解の状況に応じた課題の設定など、特異な才能のある児童生徒をはじめ子供の関心等に合った授業や学習活動の在り方
- ☐ b 特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが互いに尊重される授業や学級経営の在り方など、多様性を包摂する学校教育環境の在り方
- ☐ c 児童生徒が普段過ごす教室や学校内の他の教室等、指導・支援に取り組むための多様な学びの場の設定や連携の在り方や、過ごしやすい居場所としての環境整備・人的サポート等の在り方
- ☐ d 特性等を把握するためのサポートを受けながら行う特異な才能のある児童生徒への指導・支援の在り方
- ☐ e 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応の在り方

（研究領域2）学校と学校外との連携に関すること

- ☐ f 学習面・生活面にわたる学校と学校外との機関との連携による指導・支援の方法

- ☒ g 特異な才能のある児童生徒に支援を提供するための学校外の機関の在り方や、その機関と連携して学習を行う際の学習状況の把握や学習評価の在り方
- ☒ h 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応

（研究領域３）児童生徒を取り巻く環境の整備に関すること

- ☐ i 教職員への研修の在り方や、保護者、地域社会の理解の醸成の在り方
- ☐ j 各主体が保有する情報集約や、主体間の情報連携・共有の在り方
- ☐ k 児童生徒の機微な情報の共有の在り方、進学時の情報の引き継ぎなど学校段階間の連携の在り方

（２）研究における取組

<内容>

- ・事業に応募した児童生徒、保護者との面談を通して、得意分野や隠れた能力を把握する。また、把握した得意分野や能力を伸ばすため、一人一人に応じた指導計画を保護者、支援する大学教員等と作成する。
- ・東京工科大学と連携し、東京工科大学教授及び講師から高度なプログラミング技術、コンピュータグラフィック技術を学ぶ講座を実施する。
- ・東京八王子中央ライオンズクラブと連携し、児童生徒が得意分野で才能を存分に発揮できるよう、コミュニケーションスキルを学ぶ講座を実施する。
- ・運営指導会議を開催し、有識者から本事業に対する指導・助言を仰ぎ、事業内容を改善する。
- ・児童生徒の変容を記録する「学びの記録」を作成する。
- ・児童生徒の「学びの記録」を在籍校の教員に報告し、学校内での変容を把握する。

<経過>

月	取組内容
4 月	・東京工科大学とのカリキュラム調整
5 月	・コミュニケーションスキル学習にかかる地域協力団体（東京八王子中央ライオンズクラブ）とのカリキュラム調整 ・運営指導会議委員就任候補者への事業説明
6 月	・講座を受講する児童生徒及び保護者との面談実施 面談内容はカルテに相当する「学びと成長の記録」に記載。 ・プログラミング講座講師（東京工科大学教授・助教）及びコミュニケーションスキル学習講師（東京八王子中央ライオンズクラブ、特定非営利法人青少年育成支援フォーラム）と児童生徒の特性や配慮事項等を共有、指導方法等を決定。 ・第 1 回講座（講座開講式） 講座は講師 3 名、アシスタント（大学生）最大 15 名体制で実施 ・第 2 回講座（プログラミング・コンピュータグラフィック）
7 月	

8 月	・ 第 3 回講座（コミュニケーションスキル学習） ・ 第 4 回講座（プログラミング・コンピュータグラフィック）
9 月	・ 第 5 ・ 6 回講座（プログラミング・コンピュータグラフィック）
10 月	・ 第 1 回運営指導会議 ・ 第 7 回講座（プログラミング・コンピュータグラフィック） ・ 第 8 回講座（コミュニケーションスキル学習）
11 月	・ 第 9 ・ 10 ・ 11 回講座（プログラミング・コンピュータグラフィック）
12 月	・ 第 12 回講座（作品の発表・コミュニケーションスキル学習・講座閉講式）
1 月	・ 第 2 回運営指導会議
2 月	・ 東京工科大学と令和 8 年度実施に向けた調整 ・ 研究成果報告書の提出
3 月	・ 令和 8 年度の事業実施に向けた関係諸機関との調整

3. 実証研究の成果や課題

<成果>

（１）成果１ プログラミング能力の高まり

東京工科大学の教授及び講師からの専門的な指導を通して、一人一人の特異な能力としてのプログラミング技能が向上した。主に、プログラミングのコースでは、プログラミングを使用してゲームの開発ができるUnityを使用し、受講生が思い思いのゲームを作成したり、AIによるプログラムを開発したりするなどした。

（２）成果２ コミュニケーション能力の向上の高まり

本講座では、東京八王子中央ライオンズクラブの支援を得て、コミュニケーションスキルを高める活動である「ライオンズクエスト」を行った。この活動を通して、受講生同士、受講生とアシスタントの学生同士で円滑なコミュニケーションを図れるようになった。また、自分の考えを全体の前で発表する機会も多く設定されており、自分の考えを表現する力も高めることが出来た。

（３）成果３ 学校や家庭生活への好影響

受講生の保護者からは、「Unityは英語で使うので、英語の勉強を頑張るようになり、英検にもチャレンジした」、「プレゼンテーション能力の向上を自分でも感じることが出来ていたようである。学校での発表の仕方が変わったと言っていた」、「コミュニケーション能力が向上し、多くの友達と遊ぶようになった」等の成長の様子が報告されている。本事業において経験したことを前向きに捉え、学校や家庭生活に良い影響をもたらしている。

（４）大学生アシスタントの成長

コンピュータグラフィック・プログラミングの講座とともに毎回多くの大学生がアシスタントとして、受講生のサポートをしてくれた。専門的な内容の他に、ライオンズクエストなどのコミュニケーション活動にも積極的に参加し、受講生との良好な関係を築き、本事業の円滑な運営に尽力した。また、本事業を通して、大学生間の横のつながりもでき、大学生自身の成長につながった。

＜課題＞

（１）課題１ 受講生の募集方法

本事業は、本来「特異な才能」をもつ受講生を対象に行っているものである。しかし、「コンピュータグラフィックまたはプログラミングが得意だから」という理由で受講している受講生も多く見受けられた。令和７年度以降は、各学校に周知をする際、本事業の趣旨を十分に説明し、その上で、受講希望者は事前に制作した作品を市教育委員会へ送付し、指導者に作品を確認していただき、選抜の基準の一つとしていく。

（２）課題２ コンピュータグラフィックやプログラミングの活動とコミュニケーション活動の効果的な融合

「特異な才能」をもつ受講生にとっては、コミュニケーション活動を苦手と感じている者が多い。令和６年度の実施では、コミュニケーションが苦手な受講生の中で、コミュニケーション活動の会を欠席したり、コミュニケーション活動をきっかけに欠席が始まった受講生がいたりするなど、受講生にとって敷居が高いと思われる側面もあった。そのため、毎回のコンピュータグラフィック・プログラミングの活動と、コミュニケーション活動のバランスを考えて本事業を計画していく必要がある。

4. 参考資料

- ・ 令和６年度「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」第１回運営指導委員会 報告資料
- ・ 令和６年度「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」第２回運営指導委員会 報告資料